

2025 年度 神戸市外国語大学 学校推薦型選抜・社会人特別選抜 入学試験問題【小論文】

次の文章は、福間良明著『「勤労青年」の教養文化史』の一部である。この文章を読んで、設問に答えなさい。

1962 年 4 月、映画『キューポラのある街』（浦山桐郎監督、日活）が公開された。鋳物工場が集まる川口市（埼玉県）を舞台とし、中学卒業後の進路や貧しさに悩む主人公ジュンの姿を描く作品である。主演の吉永小百合をスター女優に押し上げたことでも知られている。

鋳物職人の娘・ジュンは、中学 3 年で高校受験を控えていた。成績は抜群に優秀で、県下トップの進学校も十分にねらえる位置にあった。しかし、父親が工場を解雇されたことで、高校進学は絶望的になる。父親はなけなしの退職金をギャンブルですってしまい、運よく再就職できた工場も半月で投げ出してしまった。やけ酒をあおっては家族に当たり散らすことが日常となり、家庭の空気はじつに荒んだものとなった。進学の望みが断たれたジュンは自暴自棄に陥り、修学旅行もすっぽかしてしまう。

しかし、川口を離れることになった友人の言葉がきっかけとなり、ジュンは気持ちを切り替え、働きながら定時制に進むことを決意する。折しも、父親が元の工場に復職できることになり、両親は全日制の進学校への進学を勧めるが、ジュンは決意を次のように語っている——「だけど母ちゃん、昼間 [= 全日制] にはないような凄く頑張り屋でいかす人がいるわよ。それにね、これは家のためっていうんじゃないよ、自分のためなの。たとえ勉強する時間は少なくとも、働くことが別の意味の勉強になると思うの。いろんなこと、社会のことや何だとか」。

そこには、格差や貧困に喘ぎながらも「実利を超越した勉学」を追い求めようとする価値規範が浮かび上がる。全日制への進学が可能になったにもかかわらず定時制を選び取ったのは、「いろんなこと、社会のことや何だとか」を深く追求しようとする意志によるものであった。「いい大学」「いい会社」に進むための勉強ではなく、あくまで人生や社会を掘り下げて思考しようとする姿勢を、読み取ることができよう。

この映画は同年度のキネマ旬報ベストテン第 2 位、映画評論ベストテン第 1 位を獲得するなど、高い評価を得た。さらに同年 11 月には、フジテレビ（火曜劇場）でもドラマ化された。この物語に対する社会的な共感の大きさを垣間見ることができる。

だが、今日の日本社会で同様の主題の映画が作られたとして、はたして同じような評価や興行成績を得ることができるだろうか。「実利を超えた何か」を追求すべく、働きながら定時制高校に進学しようとする少女の物語は、現代においてどれほど涙されるものになり得るだろうか。『キューポラのある街』に描かれたような貧困や格差、雇用の不安定は、現代にも広く見られるものである。高等教育の無償化も、社会的な論点となっている。しかし、「さまざまな困難を乗り越えて、働きながら学び、実利を超えた何かを追求する」ことが、劇映画やテレビドラマの主題となり、感動を呼ぶ状況は、今日では想像しがたい。ちなみに、いくつかの大学の授業のなかで筆者がこの映画を取り上げた際にも、「さほど面白いと思えなかった」という感想が大多数であり、「実利を超越した勉学・教養」という主題については、「共感できた」という回答は皆無だった。

こう考えると、かつて広がりを見せていた大衆教養主義がなぜ衰退したのか、という問いが浮かび上がる。教養主義とは、「読書を通じた人格^{とうや}陶冶」の規範を指す。大正期から 1960 年代にかけて、旧制高校・大学キャンパスでは、文学・思想・哲学等の読書を通して人格を磨かなければならないという価値

2025 年度 神戸市外国語大学

学校推薦型選抜・社会人特別選抜 入学試験問題【小論文】

観が広く共有されていた。古今東西の古典を集めた岩波文庫が学生たちに読まれたのも、そのゆえであった。これは試験でいい点を取ったり、よい就職先にありつくことを目的とするものではなかった。

だが、教養主義は決して学歴エリートの特権物だったわけではない。大学はおろか高校にも進めなかった勤労青年たちのあいだにも、「読書や勉学を通じて真実を模索し、人格を磨かなければならない」という価値観は少なからず広がっていた。読書や内省、社会批判を主題とした人生雑誌（『葦』『人生手帖』など）が勤労青年たちに読まれたのも、そのゆえである。「家のためっていうんじゃなくて、自分のため」に定時制進学を決意したジュンの姿にも、同様のものを読み取ることができる。さらに言えば、映画のなかでこうしたテーマが選び取られ、社会的に好評を博したところに、大衆教養主義が広く支持されていた状況を見出すことができよう。

しかし、今日では「実利を超越した読書・教養」といったものは、ポピュラー文化ではもちろんのこと、教育に関する議論においても、ほとんどふれられることはない。教育をめぐる経済格差や高等教育の無償化はしばしば論じられるが、多くの場合、そこで念頭に置かれているのは、社会上昇の問題である。上級学校進学の希望が阻まれることで、就職や雇用形態が制限され、階層上昇が困難になってしまう。こうした状況をどう改善していくのが、そこでの論点である。これが喫緊の課題であることは言うを俟たない。だが、格差や貧困が社会問題になっていた点では、『キューポラのある街』の時代も同様である。当時は高度経済成長期の前半期にあたりながらも、家計困難のゆえに高校進学が叶わない青年は少なくなかった。では、かつて、教養主義的な価値観はなぜ、映画のようなポピュラー文化においても広く共有されていたのか。そして、それが消失したのはいつ、なぜだったのか。

福間良明『「勤労青年」の教養文化史』（岩波書店、2020年、2～5頁）より抜粋。出題に際して一部省略したり表記を変更したりした箇所がある。

設問1 筆者の説明する「大衆教養主義」について300字以内でまとめなさい。

設問2 現代日本社会において教養がもつ意義について、著者の「大衆教養主義」についての考えに対して、賛成もしくは反対の立場を表明したうえで、あなたの考えを具体例を挙げながら500字以内で述べなさい。